

セミナー レポート

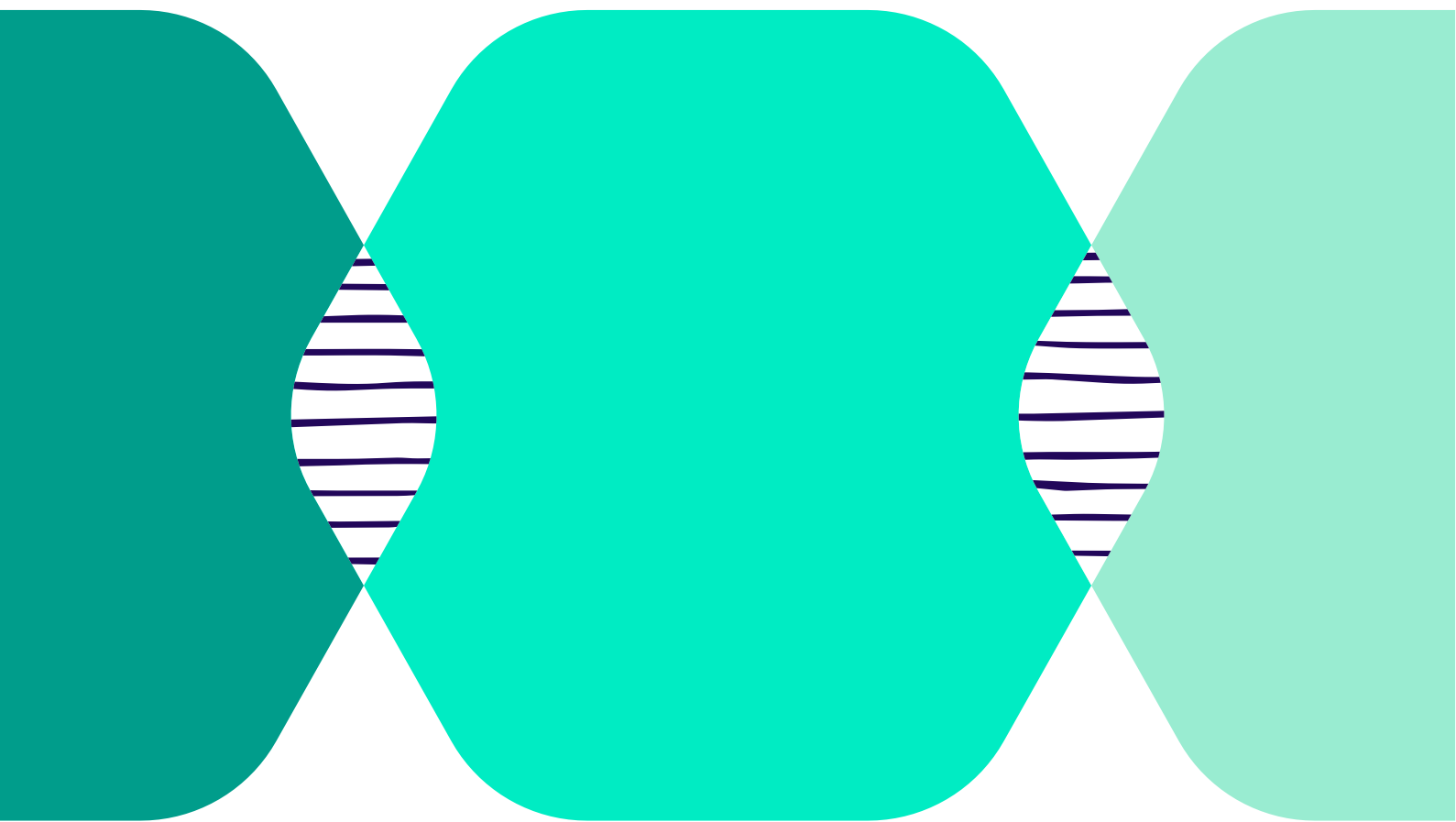
小学校英語教育セミナー

「すべての児童が『できる!』 新しい小学校英語へ
『聞く話す』と『読み書き』を連動し、その先へつなげるために」

講演 「読み書きがつまずきになる前に—科学で支える小学校英語」
武庫川女子大学准教授 村上加代子氏

www.britishcouncil.or.jp

2025 年 8 月 23 日開催



中学校で英語の読み書きにつまずく子どもたちがいます。その解決の糸口は、小学校の英語活動の中に見つかります。英語の読み書きには発達の手順があり、それに即した指導法があるため、初期の段階で適切に取り入れるのです。

和歌山県高野町の小学校では、「すらすら言える！」「読める！」「英語が楽しい」という感想が増え、日々の授業で「小さな成功体験」を積み重ね、「自分はできる！」という自己効力感の高まりました。

中学校やその先の人生における英語力の基礎をつくるだけでなく、子どもたちの可能性を広げるための小学校での英語教育で何が必要なのか、また和歌山県高野町での小学校での効果的な指導法などを通して、新しい小学校英語の取り組みについて考えました。

本レポートでは、まず、武庫川女子大学准教授 村上加代子先生のご講演要旨をまとめております。紙幅が限られるため関係から割愛させていただいた内容もございますが、少しでも多くの先生方のご参考になればと願い作成をいたしました。

”

- 人造文字言語の体験から本当にディスレクシア状態になり、今まで子どもたちにどんな指導をしていたかとよくわかりました。
- 子どもたちが英語につまずきを感じる原因が、文字と音の対応にあるとわかりました。そこを理論的に解決することは、子どもの安心感につながると思いました。
- 3～4年生からフォニックスに触れなくてはと思いました。ひらがなのように始めやすい文字（高頻度・低難易度）から始めていくのが子どもたちにとっても取り組みやすいとわかりました。

（セミナー参加者の感想）

講演

「読み書きがつかずきになる前に一科学で支える小学校英語」

武庫川女子大学准教授 村上加代子氏

本講演では、「読み書き指導の空白地帯」とも言える日本の英語教育の現状をふまえつつ、小学校中学年から中学校にかけて、子どもたちのどのような力に着目し、どのように育んでいくべきかを考えます。すべての子どもの成長を支えるために、そして違いを「つかずき」とせず「学びの出发点」とするために、指導者に求められる「読み書き指導の科学」のアップデートをご提案します。

■日本の英語教育がもたらす「ディスクレシア状態」

まず、私が考案した人工言語を使って、新しい言語を学ぶという体験から始めてみましょう。皆さん、私に続いて、単語をリピートしてみてください。知らない単語を聞いて発声する時、意味がわからない音の連なりがあると、これを一時記憶して同じ順序で出さないといけません。それにはワーキングメモリが影響するため、聴覚的なワーキングメモリの高い方はこれまでに聞いたことがない単語でも難なくリピートできます。けれども、少し長い文章で言われると怪しくなる方が出てきたりと、個人差が大きくなります。

次にそこに意味を入れてみます。「私はウサギが好き」が、この人工言語では、「ナラウ・スナイ・メイク」です。馬が「バトロメア」の場合、「私は馬が好きです」は「ナラウ・バトロメア・メイク」となります。最初はどこを区切った方がいいのかすらわからないところから、「ナラウ」は「私は」を意味するらしいとか、真ん中が変わったからどうやらこれが単語らしいとか、頭の中で推測しながら文構造を考え、意味を繋げていく作業が起こります。けれども音声情報が多くなればなるほど、正確に記憶することが難しくなります。学習者が音声だけで全てのやり取りをしたり、単語を蓄積していくことは限界があります。

そこで文字というのは、音声を思い出す手がかりになります。この人工言語でもアルファベット表のようなものを作りました。ウサギという単語は「スナイ」であるのに、この文字表を見ると「バ・ム・ラ」になっています。文字表を見て覚えたとしても、文字表にある読み方と実際に聞いた単語の音が違うので、「読めない」ということになります。

今皆さんに疑似体験いただいたのが、文字と音を正確に変換（デコーディング）できないために単語が読めない、書けないという「ディスクレシア状態」状態です。「ディスレシア状態」は、適切な指導が不足しているために、本来持っている学習能力を発揮できない状態を指します。日本の英語教育における指導の欠如が、多くの子どもたちをこの状態にしています。

英語も同じ教え方をしている

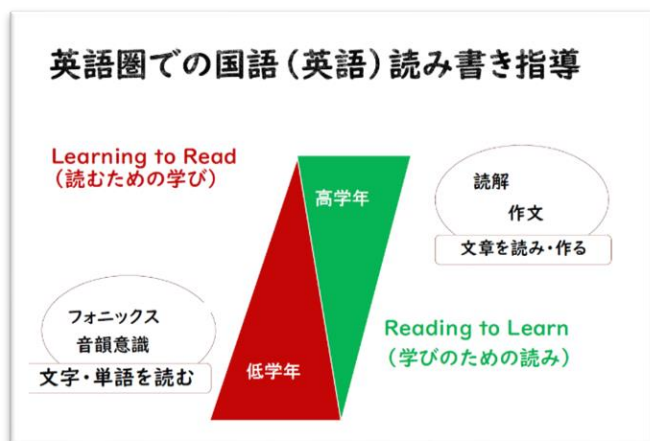


アルファベット文字には「名前」と「音」がある



■日本語音節が、英語習得を疎外

英語圏では、幼児期から音声的な学びを文字レベルにまで細分化し、音を繋いだり分けたりする遊びを通じて、段階的かつ体系的に読み書き指導が行われています。初期段階は「読みのための学び期(learning to read)」とされ、基礎力を身につけた後に「学びのための読み期(reading to learn)」へと移行します。

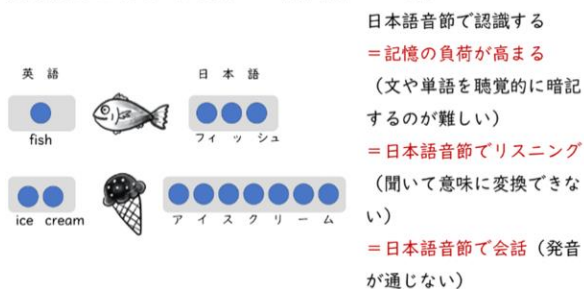


読解力には文字指導が含まれ、これは最終的には文字によるコミュニケーションを成立させるためのものです。読解(内容理解)に繋がるためにはある程度流暢にスピードを持って読めないといけないし、それを支えるのは文構造の知識です。単語がどう並んでいたらどういう意味なのか、ここがわからないといけません。そして、その単語の意味そのものも蓄積していかないといけないので、語彙力っていうのが必要になります。その下の三つのスキル「文字認識」「音韻意識」「デコーディング(文字と音の対応規則)」が語彙を支えている3本柱です。

音韻意識は、その言語の音の単位です。英語の「音節」や「音素」を認識する力で、日本語の「拍」とは異なります。例えば日本語話者は「おばあさん」と「おばさん」の違いは明白で、「おばあ」と伸ばす音節の感覚があります。けれども、英語の音節感覚を持っていたら母音が一つ、音節が一つとなるので、「おばあ」という伸ばし音には母音がない。だから「おばあさん」も「おばさん」もトントントント、4 節になる。この日本語音節が、英語習得を疎外しています。例えば「Fish」は、英語音節では1ですが、日本語だと「フィ・ツ・シュ」と3拍になります。

しかし日本の英語教育では、「文字を教え、アルファベットを読んだ後、単語を覚える」という順序が一般的であり、英語圏で重視される「音韻意識」や「文字と音の対応」といった「デコーディング」の部分が欠落しています。さらに、例えば「ice cream」と英語の2拍ではなく「ア・イ・ス・ク・リ・ー・ム」と7 拍の、日本語の「拍」で英語を認識することで、ワーキングメモリーに負荷がかかります。リスニングやスピーキングの際に「カタカナ英語の音声を介して意味を理解する」という余分なプロセスが生じ、スピードやコミュニケーション能力に影響を与えるわけです。

英語と日本語の音節の違い

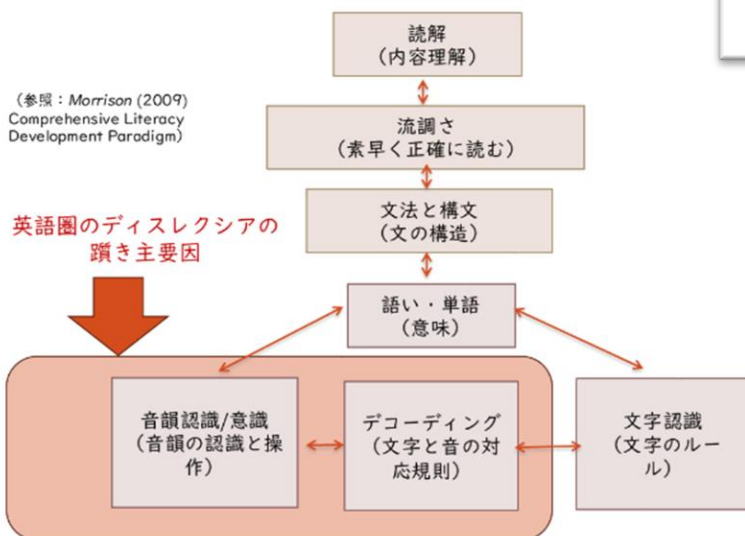


長年に渡って「日本語音節」は英語習得を阻害する

ディスレクシアと英語圏の読み書き指導

(参照: Morrison (2009) Comprehensive Literacy Development Paradigm)

英語圏のディスレクシアの
顕き主要因



■フォニックスについて

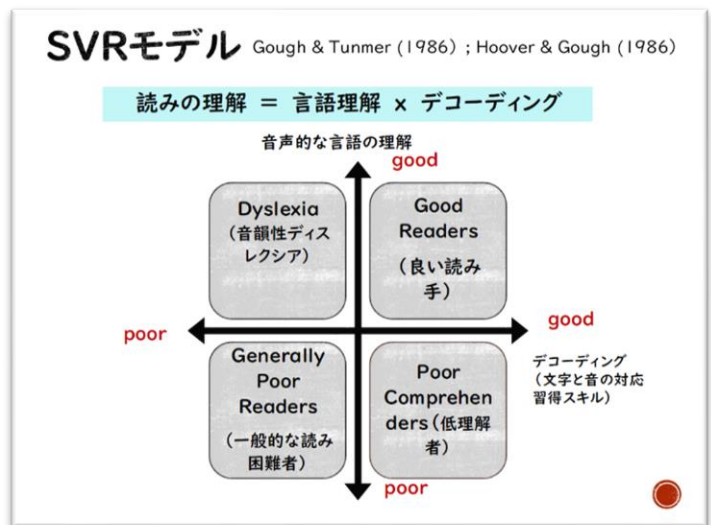
そんなことから、従来の日本の英語教育における「Look & Say」や「丸ごと暗記」では、文字と音の対応関係を理解できない子どもにとっては、漢字のように形を覚えることになり、知らない単語は読めませんし、書けません。私の研究でも、中学生 450 名対象したアンケートで、英語学習で最も難しいと感じる項目として「英単語」が突出していました。日本の教育方法では、ディスレクシアではなくても「ディスレクシア状態」の子どもが非常に多いことが明らかです。特に、アルファベットの「文字の名前」(例:C(シー))と「単語の中での文字の音」(例:C(ク))のずれが大きな混乱ポイントとなっています。

こうした課題を解決するのが、フォニックス指導です。フォニックスは、英語の綴りと音の対応関係を体系化した指導法であり、特に読み書き習得の初期段階で活用されます。英語圏では、「シンセティック・フォニックス (Synthetic Phonics)」という方法が科学的に効果があると認められています。英語の「文字と音の関係」を教える教授法で、まず個々の文字の音を学び、それらを組み合わせて単語を読む方法です。まず、アルファベットの順番通りではなく、よく使われる音から学び始めます。

たとえば「s」「a」「t」など、日常でよく出てくる音を優先して覚えることで、子どもたちは早い段階から実際の単語を読めるようになります。この方法では、一つひとつの文字の音をしっかり覚え、それらを組み合わせて単語を読む練習をします。暗記に頼るのではなく、

初めて見る単語でも、自分の力で音をつなげて読むことができるようになります。

この方法は、文字を置き換えても音に変換して読める「デコーディング」の力を養う上で非常に有効です。



国際的にも、台湾では 1996 年からフォニックスが英語教育に公式に取り入れられました。2018 年には、特に小学校段階においては、音と綴り字を通して学ぶフォニックスを推奨しています。韓国では 2007 年からフォニックスが明示的に教育内容に組み込まれ、2015 年にはフォニックス教育の時間確保や学習活動の充実の必要性が指摘されました。両国ともまだフォニックス指導の確立途中ではありますが、日本よりはるかに早く導入を進めています。

私は中学生を対象としてフォニックスに関する調査を実施しました。フォニックスと音韻意識の指導を 20 回 (合計 200 分) 行った前後を比較した結果、読み書き良好群の割合が増加し、読み書き困難群が減少するなど、短期間で大きな改善が見られました。さらに、読み書き良好群の生徒は学年平均値を上回るレベルに到達し、書くことが苦手な生徒も読めるように、語彙力も向上しました。

これにより、多くの子どもがたち英語学習困難なのではなく、文字と音がつながる方法を知らないだけの「ディスレクシア状態」であったことが判明しました。本調査からは、こうした状態の中学生が実際は多くいる

英単語読み書き指導アプローチ 2

■ Phonics (フォニックス) アプローチ (synthetic phonics)

- 文字と音の対応関係を体系的、段階的に指導する手法
- アルファベット文字の“音” (sounds) を指導。
「音がつながり語になる」ことを意識させ、文字をつないで読んだり、単語を文字の単位に分けて書いたりする。(操作スキルを学ぶ)



つづりの丸暗記に頼らず、単語が読める。未知語が読める。

こと、そしてそれは、基礎的な文字と音の対応指導で改善することが示唆されました。

中学校英語の読み書きでつまづかせないためには、文字と音の対応を小学校から育成することはできません。子どもたちは、文字の名前と文字の音というふたつの読み方があることを教えても混乱はしません。今後の展望としては、日本の英語教育における「空白地帯」にフォニックスを導入することで、子どもたちの読み書き能力を向上させ、自信を育む上で不可欠です。「文字をつないだら読める」「音を聞いて書ける」という成功体験が、子どもの自立した学習への第一歩になるのです。

■参加者からの質問

今回、ご参加の先生から、以下の質問をいただきました。

（質問）

今年から徐々にフォニックスを授業時間内で指導し始めていますが、学習指導要領に記載されていないし、自治体としてそういったプログラムを取り入れているわけはありません。学習指導要領で求められていることを準拠しつつフォニックスの指導をしたいと言った場合はどういったカリキュラムで、また何年生から指導できますか？

（村上先生）

生徒さんの実態に合わせたカリキュラムマネジメントの中で入れられるのであれば3年生からだと思います。フォニックスが学習指導要領ない件ですが、文科省はもう一つ、個別最適化ということも強調しています。一人ひとりの子どもに合わせた学びの方法を提供するというのはこれまた先生の仕事です。多くの学習の読み書き困難の子どもが、文字との対応がわからなくて単語が読めないし、丸暗記では単語が覚えられない。読み書きで苦しむ子を出さないために、フォニックスを取り入れているという理論的な理由付けはできるのではないのでしょうか。

先生方のフォニックスに関する戸惑いや疑問に関して、以下に補足しました。
ご参照ください。

ブログ 子どもに寄り添う英語教育

「フォニックスは『やってはいけないこと』ではありません
— 読み書きの発達と教育制度の観点から—」

<https://english-lettersounds.blogspot.com/>

